

# 主体化に関する一考察：接続詞「けど」の場合

尾谷昌則

大阪外国語大学（非常勤講師）

odamasa@rio.odn.ne.jp

## 0. はじめに

日本語の接続詞「けど」といえば、当然「逆接」の意味が最初に思い浮かぶ。しかし現代語（特に会話）では、以下の用例のように、単純に「逆接」とは言えないものも多い。

- (1) 「主人も言ってましたけど、本当にいいコンピでいらっしゃるんですね、お二人は」  
（赤川次郎『女社長に乾杯』：444）
- (2) 「お願いします。ところでね、交際費の枠の件ですけど」伸子はもう真鍋の話はしなかった。  
（赤川次郎『女社長に乾杯』：277）
- (3) 「お湯が沸いたけど！」  
（山梨 2000, 李 1997）
- (4) 「あら、三枝さん。何ですか？」  
「ちょっと話があるんだけど」  
（赤川次郎『女社長に乾杯』：279）

例文(1)では、前節と後節の間に、はっきりとした逆接関係は見出せない。むしろ、話題の背景作りのために前節を引用しているかのような機能である。(2)は、後節が省略されてはいるものの、その機能がより色濃く現れた用法である。さらに(3)(4)では、後節が完全に背景化してしまっている。これらを単なる省略として結論づけることは容易であるが、実際の発話の場を考えると、何が省略されているのか一義的に決定できない場合も多い上、省略の多用によって語用論的強化が進行し、新たな用法として確立されつつあるとも考えられる。

そこで本論では、近年特に頻繁に使用されているこれらの「けど」の拡張用法について考察し、原義と思われる「逆接」を中心として、上記のような拡張用法を Langacker(1990, 1999)が提唱する subjectification の観点から統一的に動機付けることを試みる。

## 1. 逆接と想起関係

### 1.1. 先行研究による分類

渡部(1995)では、「けど」の用法には少なくとも対比的逆接、推論的逆接、慣用的用法の3つがあると指摘している。対比的逆接とは、たとえば例文(5)のように、主に語彙意味の対立や肯定・否定の対立を含む場合である。

- (5) a. 太郎は背が高いけど、次郎は背が低い（高くない）。  
b. あれは良いけど、これは悪い（良くない）。

一方、推論的逆接とは、明示的な反意語を含んでいるわけではないのだが、前節（従属節）で述べられている事柄から一般的に推論される出来事とは異なる結果を後節（主節）で述べる場合であり、以下のような用例がそれに当たる。

- (6) a. 一生懸命働いたけど、不幸なことに仕事も家族も全てを失ってしまった。  
b. 店に入ったけど、店員がいなかった。

そして、これら2つの分類に当てはまらない用法（つまり、何らかの逆接関係が見いだせない用法）は、慣用的用法であるとして一括されている。

- (7) すいませんけど、今何時ですか？

しかし、このような逆接関係を含まない用法を、単純に慣用的用法というカテゴリーに分類してしまってもよいのだろうか？ これではまるで、「説明がつけられない例外用法」として無視されているようなものである。

## 1.2. 逆接

どんな文でも「逆接」で接続できるわけではない。一つの文として連結する以上、前節と後節で全く無関係なことを述べているような文同士を連結させることはできない。

- (8) a. 私は犬が好きだけど、彼女は犬が嫌いだ。  
b. 私は犬が好きだけど、彼女は猫が好きだ。  
c. 私は犬が好きだけど、彼女は{イルカ/?カレー/?赤色/?健二}が好きだ。  
d. \*私は犬が好きだけど、彼女はカレーを食べている。

例文(8a)には「好き」と「嫌い」という反意語が存在しており、何ら問題はない。(8b)には反意語が存在せず、両節とも同じ「好き」という述語が用いられている。にもかかわらず逆接の「けど」によって文が連結されているのは、「犬が好き」と「猫が好き」という部分に対立を見いだしているからである。この場合の「対立」とは、「好き/嫌い」という反意関係を意味するのではなく、むしろ「対比」のニュアンスが強く、(8a)と比べても明らかに「反意」が薄らいでいる。しかし(8c)からも分かるように、どんな文でも対比できるわけではなく、両節の間に何らかの関連性がなければならぬ。その関連性とは、同じドメイン(例文(8)の場合は犬や猫のような動物のドメイン)に関して好き/嫌を述べているという共通点といえよう。つまり、接続詞で連結されている限り、何かしら関連のある話題が展開されるだろう、という想起を助ける機能こそ接続詞の最も根源的な機能と言えよう。ゆえに(8c, d)のように、その共通点が失われるにつれて想起関係も損なわれるため、文の容認度も下がる。そこで重要になってくるのが、想起関係である。

## 1.3. 想起関係

Talmy(1978)が指摘するように、複文においては従属節で述べられている事態は、主節で述べる事態にとって<描写の土台>ともいうべき機能を果たしている。Talmyはゲシュタルト心理学の用語を借りて、主節と従属節の関係が、Figure(図)とGround(地)の関係になっていることを明らかにした。Figureとは、その状況の中で最も際立っていると認識されたものであり、GroundはそのFigureを位置づけるための背景として機能するべきものである。例えば下の例文では、*house*をGroundとして用いて*bike*(Figure)の位置を特定している(9a)の文は全く問題がないのに、その関係を逆転させた(9b)の文は容認度が低くなってしまふ。これは、*house*のような大きく安定したものを同定するために、*bike*のように相対的に小さく、不安定なものをGroundとして用いるという認知的矛盾が生じるためである。

- (9) a. There is a bike near the house.  
b. ?There is a house near the bike. Talmy (1978)

このように、FigureとGroundの間には、Figureを認識するのを容易にするGroundでなければならないという一種の想起関係が存在している。先の(8c, d)にも同じことが言える。先行する従属節は、後続する主節事態の想起を助けるような機能を果たさなければならず、一種の想起関係が欠かせないのである。ただし、単純に想起関係といっても色々あるが、「けど」が担う想起関係は、前節から自然に予想される推論結果とは異なる事柄が後節に来る、というものである(例文(10)(11))。英語の*but*についても同じことが言える(例文(12))。

- (10) a. 私は63歳だけど、{?\*健康には自信がない/?\*ボディビルダーではありません。}  
b. 私は63歳だけど、{健康には自信がある/ボディビルダーです。}  
(11) a. 私は金持ちだけど、{?\*なんでも買える/?\*お金が好きだ。}  
b. 私は金持ちだけど、{なんでも買えるわけではない/お金が嫌いだ。}  
(12) a. I'm only 63, but I feel a hundred.  
b. ...a small but comfortable hotel.

つまり、「けど」が結ぶ意味的關係は表面的な反意語関係ではなく、むしろそこから導かれる推論や解釈内容などのメタレベルの意味関係なのである。

## 2. 理論的背景

### 2.1. Multiple Dominion Model

Langackerの示した参照点モデルは、人間の認知プロセスを言語研究に反映させるという意味で

大変重要な概念であるが、であるからこそ「ドミニオン」に関してもう少し詳細な考察が欠かせない。ドミニオンは、「潜在的なターゲットの集合」という具合に説明されてはいるが、それだけではどうも漠然としている。例えば次のような表現でどのような意味関係を想起するだろう？

(13) 太郎の本

これは、ターゲットである「本」の認識・同定を容易にするために「太郎」という参照点を用いた表現である。当然、「太郎の所有する本」というのがデフォルト解釈であろうが、文脈さえ整えば、「太郎が好きな本」でも「太郎の記事が載っている本」でも構わない。つまり、「太郎」という参照点を通じて「本」を認識すると言っても、「太郎」と「本」の間に成り立つ関係というのは、想像力の尽きない限り、解釈も尽きないことになる。しかし、いくら解釈は無限に存在するとはいえ、(13)の例文を聞いた時、やはり編集担当の解釈よりは所有の解釈が優先するのは疑いない直感である。つまり、ターゲットの探索領域であるドミニオンは、単純な1つの円だけで表記できるものではなく、複数の下位ドミニオンが存在しており、しかもそれらの下位ドミニオンは想起し易いものから想起しにくいものまで様々存在するのである。それを参照点モデルに組み込んだのが、下図に示すモデルである。

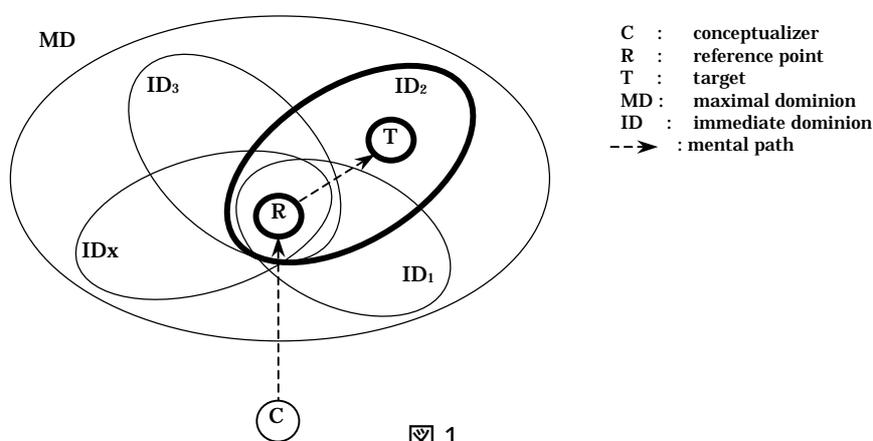


図 1

Langacker(1993)で述べられているドミニオンは、上の図では Maximal dominion(MD)に相当する。そしてその下位ドミニオンとして、複数の Immediate dominion(ID)が存在する。<sup>1</sup> 例文(13)の場合で言うなら、典型的な ID は「所有」「作成」「題材」などが考えられる。

他にもこのような ID を複数想定しなければいけない例は存在する。それを一番効果的に用いた例として、いわゆる「なぞなぞ」がある。「なぞなぞ」とは、通常誰もががついつい想起してしまう ID とは異なる ID を探したり、複数の ID の共通点を探したりするゲームである。

(14) (Q) Why is the letter *T* like an island?

(A) Because it's in the middle of water.

(15) (Q) おやつは三時、ではゆうがたは何じかな？

(A) 4 字

例えば(14)の例であるが、島は海水という物理空間の中に存在するが、「T」という文字は水(water)の綴りの中に存在する。よって、ID はそれぞれ「空間的位置」、「スペル中の位置」である。(15)では、[ji]という音韻が共通点であり、ID がそれぞれ「時間」と「文字数」である。特に問題文の最初に「おやつは三時」と言うことにより、「時間」の ID を強く印象付けることで「文字数」の ID を想起しづらくなるため、それがなぞなぞとしての面白さを生み出している。

## 2.2. Subjectification (主体化)

Langacker が提唱した概念の中でも、特に意義深いのがこの主体化という概念である。例えば(16)に挙げた英語動詞 *rise* の用法を比べてほしい。

(16) a. The balloon rose swiftly.

b. The hill rose gently from the bank of the river.

(16a)では、*rise* の最も典型的な用法であろう空間中の上昇移動の意味で使用されている。しかし

(16b)の *rise* は、丘が移動しているわけではないにもかかわらず、特に違和感のある用法でもない。このように一見奇異な用法が存在するとすぐに「*rise* の意味が拡張したのだ」と言われる。しかし、拡張という表現は、どうしても「意味が増えた」というニュアンスを生み出してしまふ。辞書的な記述をするにしても、記述すべき項目が増えるのだから、当然意味も増えたと感じられるのだらう。しかし実際には、増えたのは使用法であって、意味内容そのものは増えていないのである。むしろ減っているとも言えるのである。Langacker(1998:75)は次のように述べている。

(17) A revised characterization of subjectification can now be offered: An objective relationship fades away, leaving behind a subjective relationship that was originally immanent in it (i.e. inherent in its conceptualization).

つまり言葉の意味には、主体的な側面と客体的な側面があり、客体的な意味が背景化してしまうと、普段は意識されることがなかった主体的な意味の方が相対的に際立ってくる。それが主体化された用法となる。先の *rise* の例で言えば、風船の上昇移動を意味する *rise* は下図2のように表される。風船が物理的空間の中を上昇移動してゆくプロセス（客体的な意味）と、その風船の移動を認識するために認知主体（話者）が視線を上昇移動させながらスキャンニングするプロセス（主体的意味）がそれぞれ太線の矢印で示されている。波線矢印は、話者が風船を認識するために投げかけている視線と解釈されたい。（図は中村 1999 より引用）

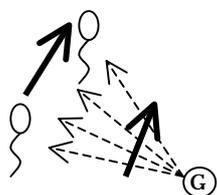


図 2

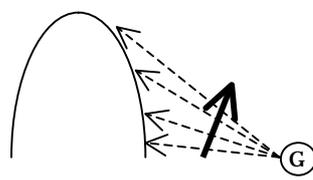


図 3

ただし、語の意味の中で何が＜主体的意味＞で何が＜客体的意味＞かというのは絶対的に決定できるものではない。あくまでも相対的なものであることは Langacker も示唆している。

(18) Subjectification is a shift from a relatively objective construal of some entity to a more subjective one. (Langacker 1999: 297、下線は筆者による)

敢えて規定するとすれば、先の *rise* の例でも見られたように、認知主体が状況を認識しようとメンタルスキャンニングを行う認知プロセスそのものが究極の＜主体的意味＞と言えよう。一方、＜客体的意味＞とは、その認知プロセスによって主体が認識し得る外界情報ということになる。

### 3. 参照点構造と主体化の観点から

#### 3.1. 「けど」の参照点構造

本節では、前節で概観した複合ドミニオンモデルに基づく参照点構造と主体化という2つの概念を用いて、接続詞「けど」について考察してゆく。接続詞は前節を参照点として経由し、ターゲットである後節の理解を助けるという参照点構造がベースになっている。<sup>2</sup>

参照点構造に基づいているからには何かしらの想起関係が必要であるため、無関係な節を1つの複文として共起させることができないのだが、それは(8)でも見たとおりである。ただし、想起関係に基づくといっても、接続詞はそれぞれ固有の想起関係を有しているため、「ので」と比較することで「けど」の参照点関係を浮き彫りにしよう。

(19) a. お腹が痛いので、{?\*頑張ります / 休んでもいいですか? / 休みます。}

b. お腹が痛いけど、{頑張ります / \*\*休んでもいいですか? / \*\*休みます。}

「ので」は因果関係示す談話レベルの参照点マーカーであり、(19a)のように従属節事態から因果関係によって一般的に誰もが想起しやすい事態が主節になるのが普通である。一方、「けど」はそれと対照的な機能を有する。(19b)にあるように、典型的な「けど」の機能とは従属節事態から因果関係によって一般的に想起しやすい事態ではなく、その予想を裏切るような事態が続くことを明示するというものであり、これがいわゆる「逆接」と呼ばれる用法である。

そこで「ので」と「けど」という2つの接続詞の機能を、参照点モデルによってスキーマ風に表

すと以下ようになる。

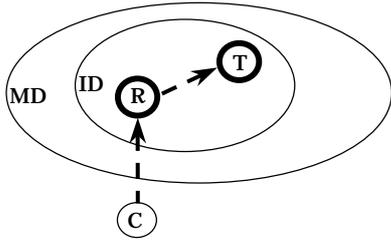


図4 : 「ので」のスキーマ

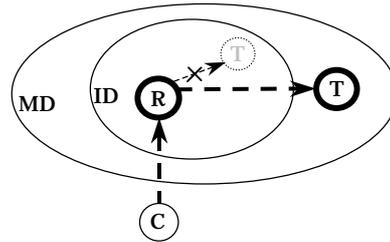


図5 : 「けど」のスキーマ

ID : 因果関係  
MD : 想起関係

「ので」の場合は、因果関係に基づいた推論によって想起される ID 内で探索可能であり、何ら特殊な参照点関係ではない。しかし「けど」の場合は、主節事態（参照点）から誰もが一般的に想起しやすいような事態ではなく、それとは相容れない事態が後続することを示すため、「ので」のように因果関係の ID の中ではなく、その外側でターゲット（主節の内容）を探索しなければならないことを示す。ただし、ID の外とはいってもやはり従属節（参照点）と全く無関係な事柄ではないため、MD を外れることはない。

前節（従属節）の表す事柄によって何かしらの推論が働くことは、以下のような例文からも分かる。例えば(20)のように、「甘いものが好きだ」とまで発話した時点で、通常想起するのは「甘い物」に含まれる様々なお菓子であろう。しかし後節で「チョコレートは好きじゃない」と発話されることから、それまで行った推論（の一部）を改訂しなければならなくなるので、「けど」が使用されている。「甘い物」に「チョコレート」も含まれるため、「甘い物が好きならチョコレートも好きなのだろう」という含意が成立するのである。

(20) 甘い物は好きだけど、チョコレートは好きじゃない。

### 3.2. 「けど」の主体化

前節では参照点構造の観点から見たが、本節では主体化の観点から考察してみる。例えば次の例を見てみよう。

(21) 太郎は犬が好きだけど、花子は犬が嫌いだ。

この文には、語彙的に反意関係になる「好き」「嫌い」を含んでおり、典型的な明示的逆接の例である。先行する従属節事態を参照点として経由することで、後続する主節事態を認識するプロセスは前節でも見たとおりであるが、そのプロセスを Langacker のステージモデルを援用して以下のように表すことにする。

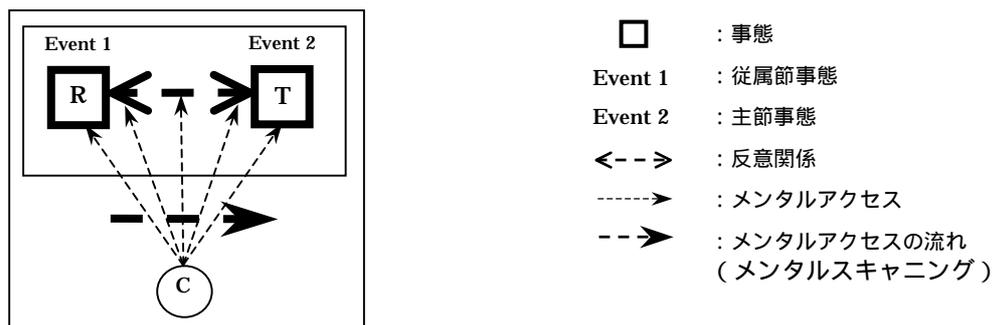


図6

節によって表される事態は、四角形で表す。従属節事態が左側の Event 1、主節事態は右側の Event 2 である。概念形成者 (Conceptualizer) が Event 1 にメンタルアクセスする（いわゆる認識する）プロセスは、概念形成者から Event 1 へと伸びる波線の矢印が表している。その Event 1 を参照点として経由することで Event 2 へとメンタルアクセスするプロセスは、波線矢印が Event 1 から Event 2 へと（右方向へ）流れてゆくことで表されている。それらの波線の矢印を串刺しにす

るように横たわる右方向の太い矢印は、そのメンタルアクセスの流れ、つまりスキニングのプロセスを表すことになる。そのスキニングを行う際に、概念形成者は Event 1 と Event 2 の間に何らかの想起関係を認識するが、「けど」の場合はそれが反意関係になるので、それは両イベントを結ぶ双方向矢印によって表されている。

この時、「けど」に反映される認知構造の中には2つの意味（認知プロセス）が存在する。1つは、Event 1（従属節）を参照点として経由することで、ターゲットである Event 2（主節）へとメンタルスキニングしながら認識してゆくプロセス（つまり参照点構造）であり、これは認知する側の意味であるから、＜主体的な意味＞ということになる。一方、その認知プロセスを通じてメンタルアクセス（いわゆる認識）される対象は、何であれ全てが相対的に＜客体的な意味＞ということになる。つまりもう1つの意味とは、Event 1 と Event 2 の間に成立していると概念形成者が認識した反意の関係である。

これら2つの意味のうち、＜客体的な意味＞だけが薄れてゆき、残った＜主体的な意味＞が相対的に顕在化するプロセスこそ、Langacker のいう主体化（Subjectification）であるが、近年頻繁に見られる接続詞「けど」の拡張用法は、まさしくこのプロセスによって生じた新しい使用法の一例である。例えば以下の文を見てみよう。

- (22) a. 日本で太陽といえば赤色だけど、アメリカでは赤色じゃない。
- b. 日本で太陽といえば赤色だけど、アメリカでは黄色だ。
- c. 日本で太陽といえば赤色だけど、アメリカでは何色なの？
- d. 日本で太陽といえば赤色だけど、赤色にもいろいろある。
- e. 日本で太陽といえば赤色だけど、唇も赤色で描く。

例文(22a)では、「赤色だ」と「赤色じゃない」が肯定・否定という語彙的な反意関係を有しているので、最も基本的な「けど」の用法である（図7）。しかし、(22b)はそのような反意関係とは違う。典型的な反意関係とは、「高低」のように二項対立が存在する場合である。しかし色に関する限りでは、様々な色が多項対立を成す。ゆえに(22b)で「けど」がマークしているのは単純な反意関係ではなく、むしろ複数概念の対立関係である。ゆえに、「反意」というよりはむしろ「対比」のニュアンスが強く、反意性が希薄化してしまっている（図8）。

さらに(22c)では、「赤色だ」という断定表現に後に「何色だ」という疑問表現が後続しており、断定文同士が対立しているわけではない。「赤色だ」に対立する（もしくは対比し得る）ものは何か、ということをも問う疑問文であることから、(22b)の場合と同じような対立関係を保持しているものの、従属節と主節の間に感じられる対立意識が(22b)よりもさらに希薄化している。それによって、「日本では赤色だ」という従属節は、後ろに続く話題の背景作りをするという機能がより優勢になり、その話題をきっかけに想起された次なる話題として「アメリカでは何色なのか？」が発話されている。つまり、想起関係によって次なる話題を談話に導入するという機能がより一層表面化している（図9）。

その機能がより顕著になるのが、(22d, e)である。太陽を赤色で表すという前節の内容から想起された話題が後節として発話されている。反意関係はほぼ完全に背景化され、前節から後節への想起関係、つまり参照点構造のみが残った「けど」の用法である（図10）。この参照点構造は、実際には(22a)や(22b)の根底にも存在しているのであるが、それらは反意関係や対比関係という＜（より）客体的な意味＞の方が際立って認識されているため、参照点構造に基づくメンタルスキニングという＜（より）主体的な意味＞が意識されていないだけなのである。

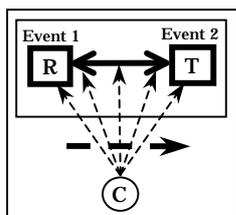


図7

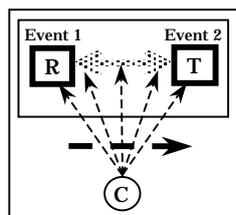


図8

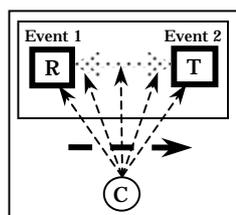


図9

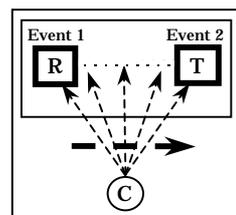


図10

ただし、上のように表した主体化のプロセスは、図7~10のような4つの段階に綺麗に区別できる

ものではなく、実際にはもっとゆるやかな連続体を成していると考えられる。

(23) 達也は南ちゃんのこと別に好きじゃないって言ってたけど、

- a. 本当は好きなんだ。
- b. 本当は好きに決まってる。
- c. 本当は好きなんだと思う。
- d. どうせ本当は好きなんだろう。
- e. たぶん嘘だ。
- f. どうして素直になれないんだろう？
- g. 彼って照れ屋さんだからね～。
- h. それって本当（かな）？
- i. 彼女はどう思ってるの（かな）？
- j. 克也はどう思ってるの（かな）？
- k. みんなどう思う？
- l. 本気で言ってるのか誰も分からない。
- m. 明日学校で直接聞いてみよう。
- n. 君も聞いた？
- o. 僕にも同じような経験があるなあ。

反意関係（明示的）

反意関係（非明示的）

対比関係

話題導入

以上の例は全て作例であるが、文法的にも語用論的にも十分に容認可能な文ばかりである。(23a)～(23d)あたりの文では、従属節と主節の間に二項対立を基盤とする反意関係が容易に感じられる。しかし下の方にゆくに従って、そのような反意関係は次第に薄れてゆき、最終的には単に従属節から主節への想起関係のみを表すようになっていく。そのような変化が極端に進んだ(23m)～(23o)あたりの用例などは近年頻繁に用いられ、今まさに拡張・定着しつつある用法である。

### 3.3. 終助詞化しつつある「けど」

#### 3.3.1 モダリティ要素としての「けど」

最後に、終助詞化しつつある「けど」について見てみよう。終助詞といえば「よ」や「ね」などのように文末に付くものであり、文の命題的な意味には何ら影響せず、むしろモダリティに相当する意味を担うものである。例えば(24)は、「合格するといい」の部分が命題を表しており、文末に付いている「(だ)けど」は、話者がその命題に対して実現するのが難しいという想定を抱いていることを示している。モダリティとは、話者が命題をどのように捉えているかを表す形式であるから、これは立派なモダリティ要素ということになる。

(24) あーあ、合格するといいんだけど。

(25) あのう....これ貸して欲しいんだけど。

さらに(25)では、「貸して欲しい」という要求の部分が命題であり、「けど」はその命題に対して「自分の依頼は実現しないかもしれない」と話者が想定していることを示している。これにより、一種のポライトネスマーカ―として機能しているのである。<sup>3</sup>

#### 3.3.2. 省略表現の一種としての可能性

以上のような例は、確かに「けど」が文末に現れてはるものの、「けど」の後には元々何かしらの主節が存在し、それが省略されているだけという可能性も当然ある。例えば(26)の場合、後続する主節として少なくとも以下のような表現を想定することが可能である。

(26) あのう....これ貸して欲しいんだけど、

- a. ?おそらく駄目だろうから無理にはお願いしないよ。
- b. もし駄目ならば、その時は諦めるよ。
- c. (やっぱり)駄目かな？
- d. どうかな？
- e. いいかな？
- f. いいよね？
- g. いつまでに返せばいい？

接続表現の場合には、省略というプロセスをたどることで生まれてきた用法も存在するので、一概に「けど」の意味が拡張しているとは言えないかもしれない。しかし接続詞のような連結詞の場合は、談話レベルでの省略が頻繁に行われることによって、依存語から独立語としての地位を獲得する場合もあるので、これは歴とした用法の一つを確立したと考えてもよいのではなからうか。<sup>4</sup>

そもそも言語分析においては、何でも省略という概念を用いることで済ませるのも考えものである。たとえ省略と考えることが不可能ではないにしても、実際の言語表現に現れないのであれば、なるべく存在しないものとして説明するべきである。以下のような文が良い例である。

(27) a. ヤカン（#の中の湯）が沸騰している。

b. 今日の昼は定食屋で丼（#\*の中の料理）を食べた。

c. 春はあけぼの（#?がいい）。

例文(27a)では、ヤカンが沸騰しているのではなく、沸騰しているのはヤカンの中の湯である。故に「ヤカンの中の湯が沸騰している」の省略形である、と考える者はいるだろうか？ (27b)でも、「丼」とは食器の一種のことであるが、実際に食べたのは食器ではなく、その中に入れられていたのものはずである。これらの例は、いわゆるメトニミーと呼ばれる現象であるが、これを省略現象として説明するのは明らかにおかしい。また(27c)などは、学校文法では「春はあけぼの（がいい）」などと省略表現として教える風潮があるが、柴田(1995)も指摘するように、そんなことをしては折角の文学性も失われてしまう。それに、「AはB」という構造はそれ以外にも多々存在する。これらは単なる省略ではなく、文レベルの参照点マーカーである「は」による想起関係を表しているだけなのである。<sup>5</sup>

### 3.3.3. 文法化の度合い

文末で用いられる「けど」は、終助詞としての地位をほぼ獲得したと考えられる。ただ、省略されているであろう要素の復元可能性という観点から見ると、全てを同等に安定した終助詞として考えるわけにはいかない。単なる省略と考えても全く違和感がない例もあれば、省略と考えるのが不自然な場合もあるからだ。

(28) 夏休みに旅行に行けるといいんだけど（子供がいるとなかなか行けない）。

(29) あのう、、、ちょっと道を教えてほしいんですけど（いいですか）。

(30) あの店、美味しかった？ うん、結構おいしかったけど（それがどうかしたの）。

これらの例は、（ ）内のような表現を復元して用いたとしても何ら不自然ではないし、実際の会話でも十分に用いられる可能性のある表現である。しかし以下の例などは、（ ）内の表現を現実

に発話することは滅多にない。

(31) 孝史ならもう寝てますけど（?起こしましょうか/?どうしましょうか）。

(32) あのう.....もう閉店なんですけど（...?帰って頂けせんか）。

さらには、後ろに何が省略されているのか想像するのが困難な場合もある。<sup>6</sup>

(33) 「それにしても、朝から刺し身か？」

「あら、嫌いだった？」

「い、いや、そうじゃないけど」（赤川次郎『女社長に乾杯』：104）

(34) 「あなたはいいわね」伸子は力なく言った。「ここが潰れたって別に食べて行くに困るわけじゃないし、お家でのおんびりしていられる身分だもの」

「ま、身分ってほどの身分じゃないけどね.....」（赤川次郎『女社長に乾杯』：27）

辞書的な意味分類を考えるならば、これらの「けど」はどう扱うべきであろうか？ どの用例にも意味の定義はしづらいかもしれない。しかし、語用論的な機能までも視野に入れて考えるならば、そこには一種の hedge（緩和表現）としての効果が認められる。特に、後節として依頼文や疑問文などが後続する場合に、この効果は顕著になる。

(35) あのねお母さん、私、東京の大学に行きたいんだけど、{いいかな/どうかな}。

(36) すみません、これ、貸して欲しいんですけど（いいですか）。

(37) あのう.....もう閉店なんですけど（?帰って頂けせんか）。

中でも(37)などは、統語的には後節を補うことは可能であるにもかかわらず、語用論的にその使用が憚られる表現であり、「けど」が単なる語彙意味を越えて、対人関係や面子に配慮するというコミュニケーション上の機能を持つに至っていることを示す良い例であろう。Traugott(1982)は、文

法化のプロセスには以下のような3つの段階が存在するとしているが、上記のような「けど」の用法は、は単なるテキスト連結機能を表す textual ではなく、その次の段階の expressive の段階まで拡張していると考えられる。



(cf. Halliday and Hasan (1976), ideational > textual > interpersonal)

#### 4. おわりに

本稿では、逆接を表す接続詞の「けど」について考察した。「けど」には、因果関係によって想起されるドミニオンの外側にターゲットが存在するということを示唆する参照点関係を表す。これにより、参照点構造を表す際に単なるドミニオン(D)という記述だけでは不十分であり、MD と ID を区別しなければならないことを示した。

また、近年よく使用される話題導入の「けど」については、接続詞としての「反意」の意味(より客体的な意味)が次第に薄れるに従って、「前節と後節を何らかの関係付けをしながらメンタルスキミングする」という意味(より主体的な意味)の方が相対的に際立ってくるという Subjectification (主体化)の結果として分析可能であると主張した。

<sup>1</sup> ここでいう Immediate dominion とは、メタファー理論などで使用されている Domain という概念とほぼ同義であると想定している。

<sup>2</sup> これは、「従属節は主節(Figure)を位置づけるための Ground として機能している」と主張した Talmy(1978)の先行研究となら矛盾するものではなく、むしろ一致するものである。

<sup>3</sup> Leech(1971)も指摘しているように、依頼をする際には相手が断るための余地を残すことがポライトネスを高めることにもなる。英語の法助動詞 (Modal Auxiliary) の場合は、現在形ではなく過去形を使用することで依頼を断る余地を残すことになるが、「けど」の場合は逆接のニュアンスを含ませることで「依頼はしてみるけど、ひょっとしたら私の依頼は実現しないかもしれない(もしくは、断られるかもしれない)ということは私も覚悟している」という態度を表出することになる。方法こそ英語とは異なるが、やはり結果的には同じくポライトネスマーカの役割を果たしていると考えられる。

<sup>4</sup> 山梨(1995)では、接続詞が照応詞を含む機能表現として先行文に依存した表現から独立語へと派生した一種として、以下のような例を挙げている。

(i) a. 花子がパーティに行くなら、僕も行く。

b. A: 花子がパーティに行くよ。

B: それなら、僕も行く。

c. A: 花子がパーティに行くよ。

B: なら、僕も行く。

山梨(1995:70)

さらに文法化が進むと、以下のように語形までもが変化する場合もある。この種の連結詞の談話レベルにおける文法化の問題に関しては、黒田(1994)、Ohori(1994)を参照。

(ii) A: どうしても留学したいんです。

B: じゃあ、すれば。 Ohori(1994:148)

<sup>5</sup> このような想起関係を表す「は」の他の用法としては、次のようなものがある。

(i) a. 北は北海道から南は沖縄まで.....

b. 干菓子は京都。

c. 朝はパン。

d. 生まれは柴又、名は虎治郎.....

<sup>6</sup> 次の(i)のような場合は、省略というよりはむしろ(ii)のような文を倒置したものと考えべきであろう。

(i) ねーちょっと聴いてくれる？ 私、今超ムカついてるんだけど。だってさ、彼ったらね.....

(ii) 私、今超ムカついてるんだけど、ちょっと聴いてくれる？ だってさ、彼ったらね.....

---

## 参考文献

- Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- 黒田 航 1994. 「接続表現の諸相 言語のアルゴリズム論的な理解に向けて」 京都大学、人間・環境学研究科、修士論文
- Langacker, Ronald W. 1984. Active-zones. *Proceedings of the Annual Meeting of the 10th Berkeley Linguistics Society*. pp.172-188.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics*. Vol.4, No.1, pp.1-38.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. (Cognitive Linguistic Research 14.) Berlin / New York: Mouton de Gruyter.
- Leech, G. N. 1971. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- 宮島達夫・仁田義雄 (編) 1995. 『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』 東京：くろしお出版
- 中村芳久 1998. 「認知類型論の試み：際立ち vs. 参照点」 *Proceedings of Kansai Linguistic Society*. Vol.18, pp.252-62.
- 中村芳久 1999. 「認知文法から見た語彙と構文：自他交替と受動態の文法化」 第2回認知言語学フォーラム口頭発表
- 李 達 1997. 「文末における接続助詞の終助詞的な用法」 北京日本学研究中心、修士論文。
- 柴田 武 1995. 『日本語はおもしろい』 東京：岩波書店
- Talmy, Leonard 1978. "Figure and Ground in Complex Sentences." in Joseph H. Greenberg (ed.) *Universals of Human Language: Syntax*. Vol.4, Stanford: Stanford University Press, 625-49.
- Traugott, Elizabeth C. 1982. "From Propositional to Textual and Expressive Meanings: Some Semantic-Pragmatic Aspects of Grammaticalization". in Winfred P. Lehman and Yakov Malkiel (eds.) *Perspectives on Historical Linguistics*. pp.245-271. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 渡部 学 1995. 「ケド類とノ二類 逆接の接続詞」 宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』 pp.557-564.
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』 東京：ひつじ書房
- 山梨正明 2000. 『認知言語学原理』 東京：くろしお出版
- Yasuhara, Kazuya 2002. "Toward A Mental Space Theory of Japanese "Meta-Linguistic Riddles"". ms. presented at Kyoto University.
- 芳賀綏・佐々木瑞恵・門倉正美 1996. 『あいまい語辞典』 東京：東京堂出版